

# 私が紡いだキャリア

CASE  
01



アミー株式会社  
代表取締役  
渡部雪絵さん

CASE  
02



株式会社世羅高原農場  
代表取締役  
吉宗誠也さん

CASE  
03



ライター、作家  
ひらいめぐみさん

CASE  
04



株式会社  
LITALICOパートナーズ  
事業支援グループ マネージャー  
松本裕司さん

出産が転機となった起業家、嫌いだった地元に戻り家業を継いだ観光農園経営者、

20代で6回転職したライター、憧れた教師の仕事を手放した会社員…。

これまでのキャリアにおいて、どんな機会を捉え、どう選択を重ねてきたのか、4人にお話を伺いました。



Interview  
CASE 01

アミー株式会社 代表取締役

渡部雪絵さん

「出産」という転機をチャンスとし  
出会いや経験を活かしてつないでいく



わたべ・ゆきえ●1979年神奈川県生まれ。早稲田大学商学部を卒業し、2002年に三井住友銀行入行。05年に日本経済新聞社グループに転職。06年結婚。07年三菱UFJ証券(現・三菱UFJモルガン・スタンレー証券)に転職。12年にファンド会社に転職。妊娠を機に退職し、コンサルティング会社の業務委託で働く。出産後COACH JAPAN 会計部門の派遣社員に。15年ワンピースを企画・販売するアユワ株式会社設立。19年フェムケアブランドを扱うアミー株式会社設立。

取材・文／藤崎雅子 撮影／吉永智彦



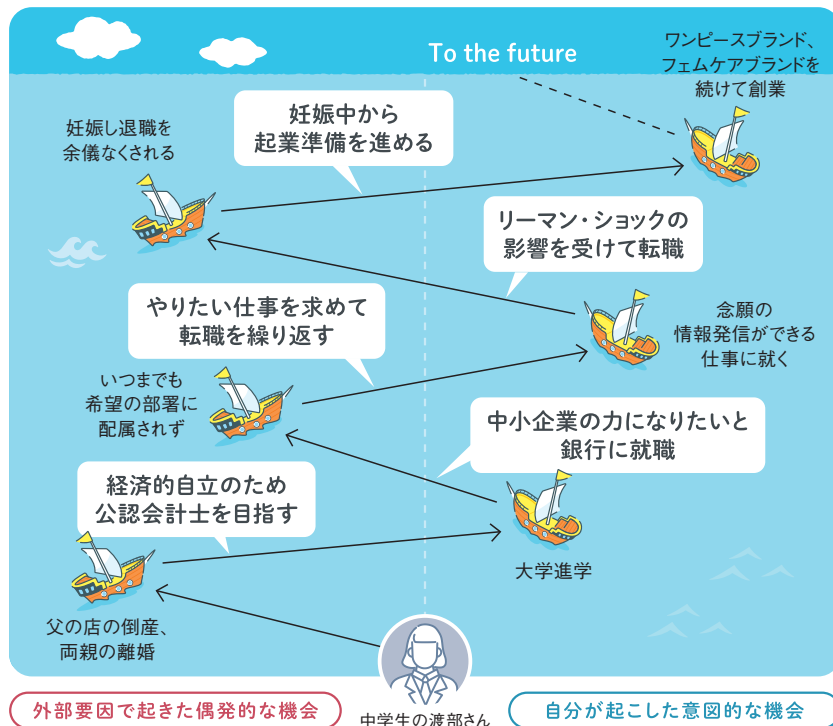
## やりたい仕事を求めて金融業界を転々

女性のキャリアにおいて、妊娠・出産をネガティブな出来事と捉える人も多いかもしれません。しかし私の場合、この機会こそが、私のキャリアを豊かにしてくれるものでした。

私が中学生のころ、父親が経営していたスポーツ用品店が倒産しました。両親は離婚し、その後は小学校教員だった母が家計を支えてくれました。そんな母の姿を見てきたからか、経済的に自立できる仕事に就きたく、公認会計士を目指して大学に進学。しかし、教授が同じ高校出身というご縁でマーケティングのゼミに入ると、「金融業界でマーケティングに携わりたい」という新たな目標をもつように。マーケティングを学んで父の商売が行き詰った原因も見えてきて、金融機関が適切な情報発信を行うことで中小企業の力になりたいと考えるようになったのです。

卒業後は三井住友銀行に総合職として入行。約3年間でさまざまな銀行業務を経験しました。しかし、やりたかった情報発信の仕事はできないままで、「そういう部署に行くには10年かかる」と。それならほかの会社でやろうと、金融

### 渡部さんのキャリアのあゆみ



Interview  
CASE 01



経済メディアの記者になりました。その翌年に結婚。刺激的な経験ができたものの早朝・深夜も働くハードな生活には疑問を感じ、また記者の仕事には外野から情報発信しているような違和感をもつように。金融経済の内側から発信する仕事を求め、証券会社に転職しました。法人向け金融商品の部署に配属され、念願の情報発信の仕事も行えるようになりました。しかし、リーマン・ショックの影響で部署が解散。異動後の仕事には魅力を感じられず、早期退職を決め、小規模なファンド会社に年間契約社員として転職しました。

妊娠が発覚したのは、その会社1年目のことでした。女性が出産後も働くことに対する理解も制度も今ほどない時代。「契約更新できない」と言われ、辞めざるを得ませんでした。ショックでした。しかし、働いて私を大学まで行かせてくれた母の姿を見ていたからか、専業主婦になろうとは思わず、コンサルティング会社の業務委託で細々と仕事を続けることに。その会社で幸運だったことは、起業を目指している同僚がいたこと。「そんな選択肢もあるのか!」と気づき、「私も起業してみたい」との思いが芽生えたのです。

## 自分の好きなことで起業し社会への還元も図る

最初、わが子のオムツかぶれに困った経験から、肌に優しいオムツの製造・販売を思いつきました。メーカー業務を学ぶため、バッグメーカーで働いたりもしました。しかし、具体的に動き出そうとすると工場探しや設備費用の壁にぶち当たり、知り合いの経営者の方に相談。「子どもが成長したあともオムツに情熱を注ぎ続けられるか。自分が好きなことをテーマにしたほうがいいのでは」というアドバイスを頂きました。あれこれ考え、浮かんだのがワンピースです。私はワンピースが好きで仕事のとときによく着ますが、生地の高さやポケットがないことなど不便を感じていました。それなら自分が欲しいと思うワンピースを作ってネット販売しよう。そう思いついたのです。

事業を始めるにあたって、どうしてもやりたいことがありました。売上の一部を子ども支援活動団体に寄付することです。妊娠で会社を辞めることになって落ち込んでいたとき、偶然インターネットで紛争地域の怪我をした子どもの映像を目にしました。「自分で人生を選べる環境にいて嘆いてばかりいられない」と思



## CASE 01



うと同時に、「自分にできることをしたい」と。金融業界で働いてきた私にできることは、資金を融通することだと考えたのです。

そんなチャリティーの側面も評価され、百貨店の期間限定出店に声がかかるなど事業は順調に滑り出し、周囲に助けられながら育児と事業に奔走する日々を送っていました。

ひょんなことから、生理用ナプキンの製造・販売という新たな事業に取り組み始めました。重い生理に苦しんでいた私に、知人が布ナプキンを勧めてくれたのが発端です。布ナプキンは洗濯がネックですが、リサーチしてみると、コットンの消費は自然を循環させることになるため、洗わず捨てても環境への影響は小さいことがわかってきました。肌にも自然にも優しい、使い捨てできるコットン製の布ナプキンがあったら助かる女性は多いのではないかと。その考えに仲間2人が賛同してくれ、共同でフェムケアブランドを立ち上げることになったのです。

生理用品に携わるなかで問題意識が高まり、最近、妊娠とキャリアをテーマに大学や男子校で講演を行うようになりました。日本社会は親子に冷たく子育てしながら働きにくいと言われるなかで、子どもをもつこと自体にネガティブな若い人が増えているように感じます。子どもの明るい声が聞こえてくる未来のために、男女問わず人体や出産の知識を備え多様な選択肢に気づき、子どもをもつことについて考えるきっかけになればと思い活動しています。

こうしてキャリアを振り返って気づくのは、「未来をつくる」という共通点。金融面からの事業者の後押し、ワンピースを通じた働く女性の応援、寄付による子どもたちの未来への投資、若い人への講演活動…未来をつくっているのだという実感が、私の原動力になっています。

想定外の出来事や失敗も多かったこれまで、たくさんの人と出会い、多様な生き方や考え方に触れ、支えられてきました。その一つに、キャリアは「積み重ねる」のではなく「つなぐ」というキャリア論があります。大事なものは、次にくる新しい環境や役割に、いかに自らが培ってきたものを活かし、主体的につないでいくか。その考え方に励まされながら、自分の心に従い流れるように過ごすなかで、キャリアがつながっていった。私は運が良いのでしょうか。しかしながら、運を動かすには、まず自分が動く必要があるのだと思っています。



Interview  
CASE 02

株式会社世羅高原農場代表取締役

吉宗誠也さん



嫌いだっただ地元で家業を継いだのは「なんとなくしかないもの」に気づいたから

よしむね・せいや ● 1976年生まれ。広島県世羅町出身。地元の世羅町を離れて、福山市の高校に進学。そのまま県外の大学に進む。もともと実家は養鶏場を営んでおり、父親が近所の農園を引き継ぎ、花の観光も始めた。20歳のときに父親が他界。大学卒業後はUターンで農園を引き継ぎ、今年で25年に。現在は「世羅高原農場」「Flower village 花夢の里」「そらの花畑 世羅高原花の森」「せらぶじ園」の4つの観光農園を運営し、花観光農園を基軸にした観光まちづくりを推進している。

取材・文／塚田智恵美 撮影／太田裕子

Interview  
CASE 02



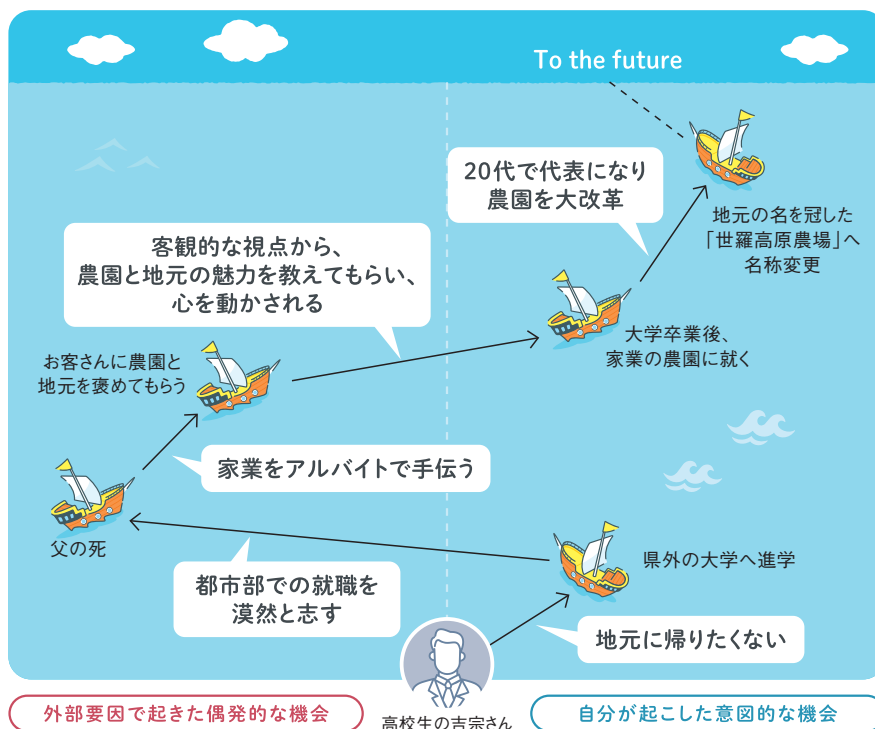
## 「いいところに住んでいるわね」心がどんどん熱を帯びていく

広島県の中東部に位置し、なだらかな山の連なる地域、世羅高原。この地で生まれ育った私は、幼いころから自分の住む町のことが大嫌いでした。

自宅があるのは山の中で、見渡すかぎり自然の風景。学校までは遠く、帰りは山道を上ることになり、体の弱かった私には苦しい日々でした。中学3年で担任の先生からたまたま紹介されて、世羅の町から離れた福山市の高校に進学し、寮生活を送ることに。地元から離れたい思いは一層強まり、県外の大学に進みました。もう地元に戻るつもりはない。将来は都会の企業で、メディア関係の仕事に就けたら、と漠然と憧れを抱き始めた大学1年生の冬に、父が亡くなりました。

もともと養鶏場を営んでいた実家では、私が高校生のころに父が近所の農園を引き継ぎ、花の観光農園を始めていました。ただ当時の私はまったく興味なし。仕事人間で厳しい父とはあまり会話がなく、私に家業を継ぐ思いなどまったくなかった。そんななかいきなり父がいなくなり、母が経営を継ぐもののドタバタ状態です。私も繁忙期には帰省して、アルバイトで農園を手伝うことにしました。

### ＼ 吉宗さんのキャリアのあゆみ /





Interview  
CASE 02



春のチューリップ畑。65,000㎡の広大な土地に200品種75万本のチューリップが植えられ、色鮮やかに開花するという。(右ページの写真は同じ場所。取材時は冬季の開園中で、チューリップの植え付けを終えたばかりだった)。

そして大学2年生の春。満開のチューリップ畑の前で接客をしていた私は突然声をかけられたのです。「あなた、いいところに住んでいるわね!」おそらく都心部からいらしたそのお客様はこの農園、そして世羅の町がいかに素晴らしいかを、勢いよく私に語り出しました。

ここはそんなに褒めてもらえるような場所だったのか——。聞いている私の胸の奥がどんどん熱くなっていきます。自分の内側で何かのスイッチが入ったような感覚に。よく知った町が、それまでとはまったく違うように思えてきたのです。そのとき自分の内側で生じた熱は冷めることがなく、大学卒業後、地元に戻り実家の観光農園業を継ぐことを選択しました。

## 「きっと咲く」その前向きさがチャンスに乗れる自分をつくる

今思えば私は、お客様の言葉によって「ここにしかないもの」の可能性に気づかせてもらったのだと思います。このあたりは標高が高く気温が低いので、市街地より花が遅れて咲きます。ちょうど5月の連休にかけて春の花が満開になり、市街地では育てにくい花を育てるのに向いている。広大な土地があり、都心では得られないような一面の花畑の感動を味わえる…。アクセスの利便性や都会らしい華やかさ、新しさといった「ここにないもの」にばかり意識が向いていた私が、「ここにしかないもの」に気づいた。しかもそれらは、地形や気候に由来する、そう簡単には変わることはないもの。





その「ここにしかないもの」の価値を、花や観光サービスを通じて町の外に向けて届けたいと考えるように。そして修行を経て20代で代表になった私は、農園の大改革を決めました。花の種類や植える時期など工夫を重ね、経営を学び、数千万円の借金をして園の施設や花畑の大改修を実施。世羅高原ならではの体験を、さまざまな客層のお客様にお届けしたいとチャレンジしました。

すると地道に続けたことの成果が表れ、入場者数や売り上げ数が右肩上がり伸びていったのです。このことで自信がつき、2007年に創業時からの「旭鷹(きょくほう)農園」という社名を「世羅高原農場」に変更しました。地元では私は群を抜いて若い経営者であり、町の名前を冠した社名をつけるのはかなり勇気がいりましたが、「私たちの仕事はこの町を発信していく仕事なのだ」と、不退転の決意を社名に込めたのです。気持ちが固まったところに、たまたま地方新聞からコラム執筆の依頼を受け、町の良いところを発信できる機会だと喜んで引き受けることに。メディアに取り上げてもらう機会も増えていき、新しい企画を立ち上げたり、花の種類を増やしたり。そして今や運営する観光農園は4つに。現在5つ目の施設の開園に向けて取り組んでいるところです。

2024年春に開催した「世羅高原春の花めぐり」では総計17万7000人のお客様にいらしていただきました。この数字は世羅町の人口の約12倍にあたります。高校時代の私には、それほどの観光客が地元に訪れている未来も、この地で働いている自分の姿も、まったく想像できませんでした。自分の住む町が嫌いで「こんな田舎には何もない」と否定的な捉え方をしていた、あのころの私のままなら、挑戦するタイミングが目の前に訪れたとしても、気がつかずにスルーしていたかもしれません。前向きに、「今ここにあるもの」の良いところを見ながら取り組んでいると、やってくるチャンスに全力で乗ることができるのです。

チューリップ、ひまわり、ダリア…。どの植物も、花が咲くのは一年にたった一度です。私たちはその一瞬のチャンスにかけて1年間全力で取り組みます。天候など状況は毎年変わり、いつ咲くか、どう咲くか、そのとき周りの環境がどうなっているのか、事前に予想はできません。それでも、来たる機会を必ずつかむため、咲くことを信じて取り組み続ける。その前向きさが未来を切り開くのは、きっとキャリアも同じですね。



Interview

# CASE 03

ライター、作家  
ひらいめぐみさん

6回転職して行き着いたのは  
自分の心に忠実な表現や人生の選択

ひらいめぐみ●1992年生まれ、茨城県出身。大学時代に「大好きなメロンパンを通じて、コンゴ民主共和国の紛争問題を伝える」を掲げて「メロンパンフェス」を主催。その活動を優先するため就職せずアルバイトを続けるも、健康や年収など生きる基盤を整えたいと就職。その後転職を繰り返し、現在はフリーランスでライターとして活動するかたわら作家として執筆も行う。2022年に私家版「おいしいが聞こえる」、2023年「踊るように寝て、眠るように食べる」、2024年「転職ばかりうまくなる」を刊行し注目を集める。

取材・文／塚田智恵美 撮影／澤崎信孝



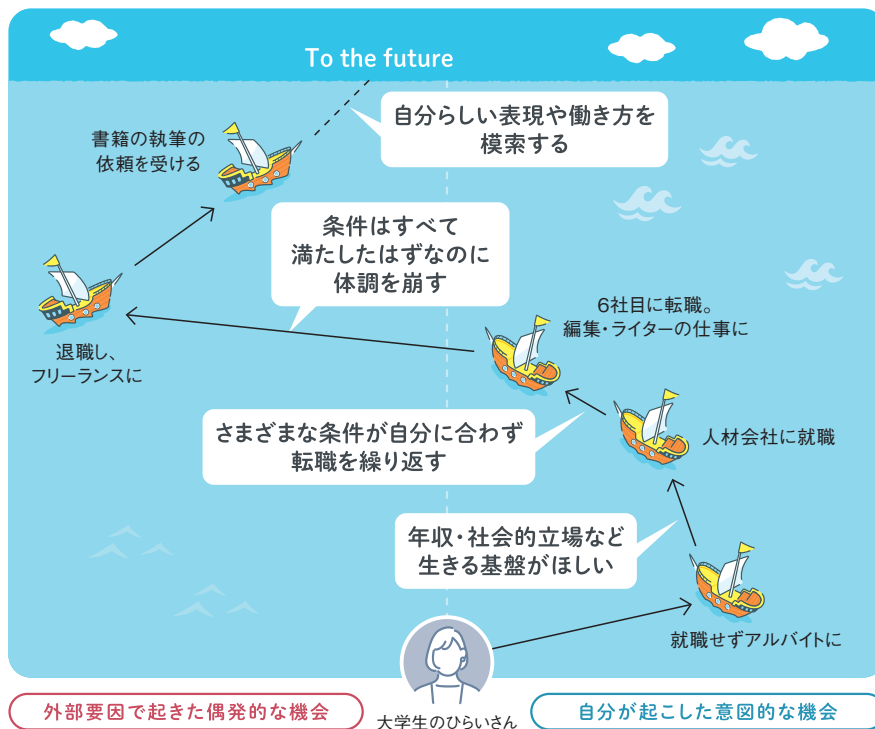
## 「転職」はネガティブじゃない？

20代で6回転職。友達にはふざけて「転職のプロ」と呼ばれることもあります。今思えば、その根っこには、違和感をスルーするのが苦手な性格があるのかもしれない。

検事に憧れて、大学では法学部に進学。しかし教授に「法曹の仕事は、人の不幸の上に成り立つもの」と言われたことで気持ちが変わりました。今思えば、法曹界の良い面ばかりを見ている学生たちに、違う視点を与える言葉だったのかもしれない。しかし私は「誰かの不幸せによってお金をもらうような仕事に就きたくない」と考えてしまって、検事の夢を断念しました。

そのころ、普及し始めていたスマートフォンに欠かせないレアメタルを生産するコンゴ民主共和国で、希少な金属が紛争の軍資金となって紛争状態を長引かせていたり、女性に対する性的暴力が横行したりしていることを知りました。私たちの便利さや幸せは、誰かの犠牲の上に成り立っている。これに強く違和感を覚えた私は、コンゴの問題を多くの人たちに伝えるため、自分なりに動

### ＼ ひらいさんのキャリアのあゆみ /







き出すことに。試行錯誤を重ねて、自分の大好きなメロンパンを切り口にしたイベントを思いつきました。

そして主催した「メロンパンでコンゴを救う」メロンパンフェスは盛況で、メディアにも取り上げられました。すると「どうせ大学生が就活のネタづくりのためにやっているんだろ」などのコメントが。誠実さを行動で示すために、大学卒業後も活動を続けていこうと決め、就職しない選択をとりました。

イベントの活動をしながらコンビニでのアルバイトを半年続け、その後はアパレルブランドの倉庫でのアルバイトを1年ほど。しかしイベント準備との両立で、多忙を極め体調を崩してしまい、健康や年収、社会的立場など生きる基盤をちゃんとつくりたいと就職活動を開始。人材会社の営業職に採用されました。

そこでこんな言葉を聞いてはっとしました。「6回転職している人がいたとしたら、それは『6回採用している人がいる』ということです」この言葉を聞かなければ、のちに「転職」にネガティブなイメージをもつこともあったかもしれません。

しかし、働きながらも、日に日に「この仕事は自分に合わない」と感じるように。生じた違和感を、世間体のためにと押し殺して続けていくのは私にはできず、退職。その後はWebマーケティング、書店スタッフ、商業施設の事務局・広報と転職を重ねていきました。

## いちいち違和感を抱く自分と借り物ではない自分の表現

6社目となる、お菓子のスタートアップ会社での採用面接は、他とは違いました。ネットで公開していた私の文章を読んできた社長が「ひらいさんのこの文章を生かしてほしい」と、自社メディアの運営や編集、ライティングの仕事をすすめてくれたのです。趣味の範囲でやってきた「文章を書くこと」を認めてもらい、不思議な気持ちになりました。そして入社を決意。これまで「自分が苦手なことに取り組むのが仕事」と思っていた私ですが、自分が無理せずになれること、周りから求めてもらえることを仕事にしてみたら、びっくりするほど働きやすかったのです。

隅田川近くにあるオフィスに通う毎日。人にも恵まれて、自分の好きな仕事をしている…。それなのに私はまた違和感を覚え始めました。職場に窓が少ないこと。会社のそばにランチを食べられるようなお店がほとんどなく、みんなデ

Interview  
CASE 03



スクでごはんを食べていること。

5回転職してきて、これ以上自分にとって居心地よく働ける会社はないと確信していました。それなのにまた私は仕事を続けられないのか？どれも小さな気がかりじゃないか。そんなことばかり気にしては贅沢だ。そう自分に言い聞かせようとしたものの、違和感は体調に表れ、少しずつ不調をきたし始め、さらに、会社員としてさまざまな制約のなか文章を仕事にすることのつらさを感じるように。ここまで条件の良い会社でこうなるということは、もう私には「会社で働くこと」そのものが合っていないんだ——そう踏ん切りがついて退職し、フリーランスになる決意をしました。

親が会社員だったということにも影響されていたのか、フリーランスで働くことはそれまで選択肢にも入っていませんでした。自分の意思だけで選択していたら、まず辿りつかなかったでしょう。自分にとってこれ以上ないと思うほど条件の良い会社でも、働き続けられなかった。その事実が自分に大きく作用して、現在のフリーランスの道に至りました。

2022年春にフリーランスになってからはさまざまな機会に恵まれ、依頼を受けてエッセイを書いたり、書籍を出したりしました。フリーランスは人間関係や働く環境が固まっていないため、自分が守りたい生活を大切にしながら、柔軟に仕事内容を模索していくことができます。自分には合っている働き方なのかもしれません。

今の仕事を定義するなら、身の回りの出来事を題材に「借り物ではない、自分の心に忠実な言葉」で人に伝える仕事です。例えば慣用句や常套句は便利ですが、その表現は、本当に自分の感じたことに沿っているでしょうか。「目から鱗が落ちる」と言いますが、私に生じたのは本当に「鱗」が落ちる感覚だったか、もっと別のものではなかったか。そうやって自分の心に忠実な言葉を追究していくと、自分らしい文章になっていく。自分の心に忠実に書き続けるには、小さな違和感であっても放置してはいけません。

職場に窓が少ないことが、まったく気にならない人もいます。でも、私は気になってしまった。そういう小さくて確かな違和感を我慢しないことが、自分の心に忠実な表現や人生の選択につながっていく。いちいち違和感を抱く自分を「贅沢」「わがまま」と思ったこともあったけれど、そういう自分だからこそ、この道に辿り着いたのかもしれません。

Interview  
CASE 04

株式会社LITALICOパートナーズ 事業支援グループ マネージャー

松本裕司さん

目  
の  
前  
の  
こ  
と  
に  
全  
力  
で  
取  
り  
組  
み  
な  
が  
ら  
や  
り  
た  
い  
仕  
事  
の  
本  
質  
を  
軸  
に  
選  
択



まつもと・ゆうじ ● 1986年大阪府生まれ。2011年に中学校と高校の教員免許を取得。中学校の体育教師を経て、12年特別支援学校に配属。13年に認定NPO法人カタリバに転職、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県女川町で運営されていた「コラボ・スクール女川向学館」にて小・中学生や高校生の学習支援や心のケアに取り組む。結婚をきっかけとして大阪に戻り、15年に株式会社LITALICOパートナーズに転職、障害者の就労移行支援事業に携わっている。

取材・文／藤崎雅子 撮影／吉永智彦





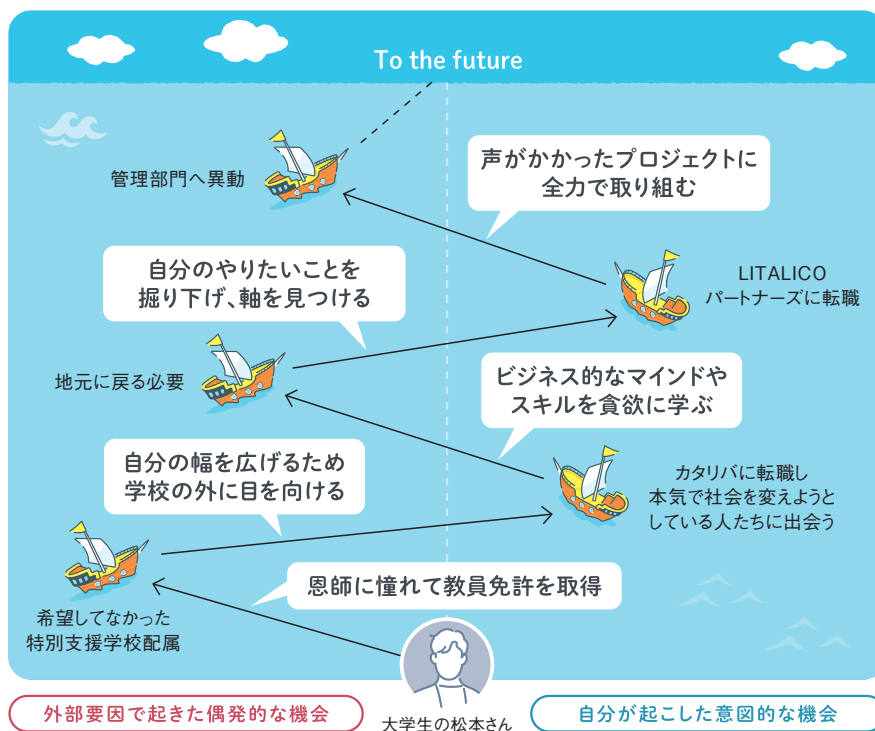
## 憧れの仕事を手放し出会った本気で社会に挑む人たち

恩師に憧れ体育教師になった僕が、なぜ今、障害者就労移行支援事業に携わっているのか。中学時代の原体験から振り返ってお話しましょう。

僕は中学生のころサッカー部のキャプテンをしていました。部員数が約90人と多く、学校が荒れていたこともあり、多様な生徒がいましたが、顧問だった体育の先生はどんな生徒でも平等に接して誰一人見放すことはなかった。私もそんな先生の姿に共感し、キャプテンとして分け隔てなく部員と関わられた。だから最後は大会で大きな結果につながったのだと思います。「諦めずにやれば結果が出る」「関わり方で人は才能を発揮する」…多くのことを学びました。恩師のように、自分も中高生の生き方や成長に関わる存在になりたい。大学生活は遊んでばかりでしたが、最後はそう腹を決め、体育教師になったのです。

1年間の中学校常勤講師を経て教員採用試験に合格し、配属されたのは特別支援学校でした。恩師のような教師生活を思い描いていた自分にとって、想定外の出来事です。それでも、多様な生徒との関わりには多くの学びがあり、

### ＼ 松本さんのキャリアのあゆみ /





悩みながらも日ごとに学校が面白くなっていきました。ただ、この先もやり続けたいかという、少し違うような気がしたのです。

元々、「さまざまな仕事を経験したほうが面白い先生になるのでは」という考えがあったので、いったん教員以外の仕事を経験するのも良いだろうと思いました。そこで、学校外から教育に携わる仕事がないか海外も含めて調べるなか、たまたま見つけたのが、東日本大震災の被災地で認定NPO法人カタリバが行う教育支援の仕事です。私が教員になった年、東日本大震災は発生しました。その年、被災地の中学校と勤務校をオンラインでつないで交流したことがあり、現地の困難な状況を目の当たりにして「自分にできることはないだろうか」と思ったものです。その時の思いに背中を押され、被災地に飛び込みました。

地元の大阪を離れ、宮城県女川町へ。そこでカタリバは地域と連携したスクールを開設し、小学生から高校生までの学習支援や心のケアを行っていました。私はその運営スタッフの一人として、子どもたちとの対話や、学校や企業と連携した企画などに、夢中で取り組みました。

そこでの出会いが、以降の私のキャリアに大きく影響しています。一緒に働いていたのは、元は東京のビジネスマンや経営コンサルタントなど、さまざまな業界から、カタリバのビジョンに共感して集まった人たち。そして、本気で社会を変えようと取り組んでいたのです。圧倒的な当事者意識とロジカルなビジネススキルをもって、国や自治体を巻き込み、海外から資金を調達してくる…。そんな仲間のマインドや行動に大きな刺激を受けました。必死に学ぼうとする僕に、職場の皆さんは忙しい時間を割いてとことん付き合ってくれ、そのときに学んだマインドやスキルは、今でも仕事をするうえでの土台になっていると感じます。

## 転職を機に考え気づいた自分がやりたいことの軸

その間に地元大阪にいた彼女と結婚。家庭のことを考え、大阪に戻ることになりました。転職にあたって改めて考え、気づいたことがあります。自分は学校教育に興味があると思っていたけれど、その根底には、外部環境によって能力が発揮されない状況にいる人をなんとかしたいという思いがあるということです。思い起こせば中学時代も、周囲のレッテルによって力を発揮する機会





が奪われることに、無性に腹が立ったものです。子どものころからの自分の習性とキャリアの軸が、すっとつながりました。そして、その軸があれば、教師や学校と離れた仕事でも、自分は満たされるのではないかと考えたのです。

そして選んだのが、現在勤務する株式会社LITALICOパートナーズの障害福祉サービスの仕事です。「障害は人ではなく、社会の側にある」という考え方に基づいた支援のあり方に共感し、自分の軸に合う仕事だと思いました。また、カタリバの仕事を通じて「思いだけで社会は変わらない」と痛感していたので、理念を大切にしながらビジネスにも強い人材が豊富な職場で、思いを実現させるための力をつけたいと思ったのも、選択理由の一つです。

入社後、配属された事業所で障害のある方を直接サポートする仕事から始め、事業所のリーダー、そして複数事業所を統括するエリアマネージャーへとステップアップしていきました。初めての業界なので、社内研修の受講だけでなく、自分で本を読んだり先輩に聞いたりしながら知識やスキルを身につけていきました。

当社には部署の枠組みを越えたさまざまなプロジェクトがあります。僕も「明るく元気だから」とビジョン浸透イベントの司会を頼まれるなど、いくつかのプロジェクトにアサインされました。「やるならより良くする」という性分なので、自分から手を挙げたことでなくても、思いをもって意見や提案を発信していました。そんな姿勢を見ていただいたのか、管理部門に抜擢いただき、現在は事業部全体の働きやすい組織づくりに携わっています。

日々難しさを感じていますが、ビジネススクールや社外コミュニティで学び、社内の現場感覚も大切にしながら取り組んでいます。従業員の皆さんから、「本来の業務に集中できるようになった」「生き生き仕事ができる」などと言ってもらえることが喜びです。

こんなふうに私のキャリアは何度か方向転換し一見ばらばらです。しかし、子ども、障害のある方、従業員…と対象は変化したものの、「人が能力を発揮する支援」という一本の軸でつながっていました。岐路に立つたびに自分を掘り下げ、少しずつその軸に気づいていき、思いに正直に行動するなかで生き方を変える出会いがあり、やってきた機会に全力を尽くすうちに道が拓けた…。当初思い描いていたキャリアとはまったく違いますが、「悪くないな」と思える人生を歩んでいます。